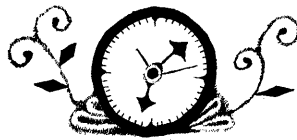


## 私の小学生時代

湯沢 雍彦



支那事変が始まった昭和十二（一九三七）年に小学校へ入学し、太平洋戦争突入一年余の十八年に卒業したのだから、私の小学校時代は完全に戦争の中にある。しかし、私が目にした限り、戦いの悲惨さや暗さの影は少しもなく、のんびりとした楽しい日々が続いていた。戦いは外地で行われるものであり、神国日本はいつも勝つものと信じていればよい小学生はずっと幸せなのであった。

私は東京の「渋谷区立千駄ヶ谷第三小学校」（現在は「鳩森小学校」と改称）というごくごく平均的な学校で、小学六年間を過ごした。父親が下級公務員で転勤がなかったからだが、途中で転出・転入した児童は一割前後しかなかったから、学校は変わらないのが普通の姿だったのだ。

「まるでランドセルが歩いているみたいだ」とからかわれながら、牛皮の大きなランドセルを背に入学式に



のぞんだ。一年に入った仲間は一二〇名弱、それが三年までは男女組三つに分れた。私の最初の隣席は荻原という活発な女の子で、入学早々、この子に下敷きやノートを隠されてしまい、半ペソをかいだ。荻原さんは三人姉妹の末っ子で、このような行為には十分慣れていたらしいが、やっと一歳の妹が一人いるだけの私には対応がわからなかったのである。担任の中年の女の先生は、この程度のイジメには何の措置もとってくれなかった。

「サイタ サイタ サクラガサイ

タ」

「コイ コイ シロコイ」

で始まる国定国語教科書巻一は、軽快なリズムを教室一杯にひびかせた。三年前までの第Ⅱ期国定教科書は挿絵も白黒で味気なかったが、第Ⅲ期からは水彩画ながら色がついて明るい感じを出していた。全国た

だ一種類の国定教科書だから定価は八銭と安く、全教科揃えても五十銭程度であった。しかし、授業料と合わせてこの教科書代を出せない家庭もあった(当時の平均月収は二十ないし八十円位だが、貧富の差が激しかった)。時々あらわれる「ぐず屋の加藤君」もその一人で、出てきた加藤君にまわりの者は競って本を見せてあげた。加藤君も悪びれることなく、くったくない笑顔でつきあってくれた。「不登校児」などという嫌な言葉はまだなかったのである。

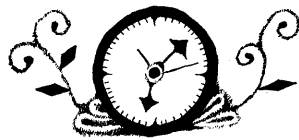
学校は明治神宮北参道入口から五分の所にあったので、毎月一日は一・二時間目をつぶして上級生の神宮参拝が行われた。朝礼で校長先生が明治天皇御製の和歌を読み上げ、それを全生徒が唱和してから出発するのだったが、六年になった時、帰校時に誰も復唱できなかったことがあった。およそ反抗的な批判精神なぞはなかったから(社会全体もそうだったが)、皆おとなしくこのおしおきに従っていた。

しかし、ふだんの明治神宮は絶好の遊び場になった。広い境内のあちこちに適当な広さの空地があり、相撲をとったり、三角ベースをしたり、追っかけっこするのいうってつけだった。ほかに中央線に沿って千駄ヶ谷駅周辺には軍の馬場があり、時々駆け抜ける軍人の馬術練習をやり過ごしては、テニスの軟球でゴロ野球をやるか、冬には軍艦ゲームか馬飛びをよくやっていた。新宿御苑も近かったので、その塀の外側をつたい歩きする土手も遊び場になった。だが帰りには、中央線の低くて陰気なガードをくぐらなくてはならないのが難点だった。「この間は、赤マントと青マントが出て子どもをさらっていったそうだ」と、お互いに言い合っては恐怖感をあおっていたからである。

時計などは誰も持っていなかったから、日暮れになるのを合図に帰っていったが、遅くなっても母親が迎えに来てくれたのは一年の時だけだった。塾も稽古事もなかったし、ラジオを聞いた覚えもほとんどない。

夕食後はちょっと予習・復習して、あとは『少年倶楽部』か本を読んで過ごした。『のらくろ』や『冒険ダン吉』などのマンガ本か、山中峯太郎の『敵中横断三百里』などの冒険小説、あるいは『愚弟賢兄』などの佐々木邦のユーモア小説を愛読した。

入学した小学校の隣には牧場があって、牛がのどかに鳴き、時々は異臭がただよってきた。三年になる頃、学校がそこを買収して運動場が広くなった。秋の運動会では、出番待ちの列から見上げると、ヤンマや秋アカネが青空を埋めつくすほど飛び交っているのが印象的だった。そして土曜日の午後、運動場に出ていると、神宮球場の大歓声がどよめいてくることがよくあった。プロ野球よりも高校野球よりも、六大学野球





の方が人気が高かった時代である。「今度の土曜日には見に行こうよ」という話がたちまちまとまった。仲間の一人の父親が慶応病院に勤めていて、いつもネット裏の券を二枚持っていた。集まる仲間は六、七人もいたが、それでも構わなかった。球場へ行くと、ネット裏券二枚を外野席の子ども料金七人分と換えてくれるオジさんが出ていたからである。

十月には毎年、京王閣まで「イモ掘り遠足」に出かけ、十一月には「学芸会」が開かれた。しかし、大正末に立てられた木造の校舎には大教室も体育館もなかったので、神宮球場前にあった日本青年館大ホールを毎年借りて行われていた。これは、今としてもまことにぜいたくな行事だった。各学年は、合唱、器楽演奏、理科実験などのほか、劇を上演した。今のように、全生徒に出席を割り振るような民主的配慮はなかつ

たから、私は何とか出席にありつこうと頑張ったものだが、二、三回しか成功しなかった。

四年の秋は、当時の日本暦で「紀元二六〇〇年」にあたり、皇居前で開かれた式典跡を見学するため、半日ばかりで徒歩で往復した。また、学校が明治通りに近かったので、原宿宮廷駅で乗下車する皇族の送迎のためしばしば治道に並ばされるなど、軍事色というより天皇色が強くなってきた、昭和十六年十二月八日朝のラジオは小学生の胸にも興奮をもたらした。戦勝ばかりを告げるラジオ放送に気分はますます高揚させられたが、食べ物、着る物、学用品の順で、いろいろな物が姿を消し始めた。チョコレート、アイスクリーム、ケーキ、クッキーなど、私の好きな洋風の菓子類は真っ先に見えなくなったのはまことに残念だった。イトコが、これはチョコの味がすると言って教えてくれた物は栄養剤か薬品だと思われたが、それを食べ尽くしたのがチョコの味とのお別れになった。「欲しがりません、勝つまでは」という垂れ幕が方々に下がり始

め、それを横目にした我々はつばを呑み込むほかなかった。

しかし、模型材料店だけは終戦間近まで続いていたように思う。子どもが航空機にあこがれるのが奨励された時代で、工作の時間にも模型飛行機作りが多くなった。『飛行少年』という雑誌を見ては少しでもレベルが高い飛行機を作り上げ、それを校舎の二階から飛ばすのを先生が手伝って下さった。しかし女の子は、工作などには手を出さず、ひたすらナギナタの訓練に励んでいるようだった。小学生は、子どもながらも「小国民」だと新聞やラジオではおだてられていた。

とうとう六年になり、受験の年がやってきた。全国的にみれば、当時旧制中等学校への進学率は一割もなかったろうが、東京はさすがに高く、我々の学年も半分以上が受験した（残りの者は入試がない小学校高等科へ行った）。数年前までは、受験する六年生を早朝

に集めて小学校で特訓をやっていたらしいが、我々の年には、戦争のためか禁止されていた。数回の模擬試験があつて、その結果で先生が相応の中学を割り振ってくださった。私は、ただ歩いて通えるという理由から「府立六中」（現在の都立新宿高校）を志願した。世間では難関校の一つと言われていたが、私はあつかましくも落ちることを考えていなかった。二倍の倍率だったとあとから聞いた。そこでの入学試験では、筆記試験が全くなく、六室をめぐる歩く面接試験と体育実技が重視された。礼儀正しく即答しなければならぬ面接の方が筆記よりよほどきついと思ったが、無事合格できた。

こうして、のんびりした小学校生活を終り、きびしくて悩み多い、戦時色濃厚な旧制中学校生活へ入っていったのである。

（郡山女子大学）